



大妻多摩中学校

二〇二三（令和5）年度

## 入学試験問題（午後）

### 【国語】

時間 50分

2月1日（水）

#### 【注意事項】

- 1 問題は17ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文の一部に省略した箇所がある。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

「地域の絆を見直す」

「地域の活力を取り戻す」

「学校で地域の歴史を学ぶ」

「防犯で大切なのは地域の目」

「地域」という言葉に、ほとんど毎日と言ってもいいくらい出合っている気がする。特に遭遇そつぐくう確率が高いのは、役所や学校（つまり行政の領域ぎょうせい）に関わる書類だろう。もし仮に「行政書類頻出単語ランキング」みたいなものがあつたとしたら、間違いないトップ3に入ると思う。

でも、この言葉、あまりにも頻繁ひんぱんに使われ過ぎて、最近では意味の輪郭がぼやけてきた。<sup>①</sup>お役所の書類に好んで使われるということは、裏を返すと「都合の良い言葉」でもあるわけで、そういうものには何かしらのカラクリがあることが多い。

手元の辞書で「地域」を引くと、〈区画された土地の区域。一定の範囲の土地〉（『大辞泉』）と出てくる。〈一定の範囲の土地〉といつても、ぼくらは誰も住んでいない土地のことを、わざわざ「地域」とは呼ばない。ある程度の人が生きていて、お店があつたり、学校があつたり、公園で子どもが遊んでいたりと、バスが走っていたりする土地のことを「地域」と呼んでいる。

冷静に考えれば、「地域」という名前の地域は存在しない。この言葉で呼ばれている〈一定の範囲の土地〉も、具体的などこかの住宅地であつたり、商店街であつたりするはず。でも、「地域」と言うと、なんだか「地域」という名前の地域が世界のどこかに存在しているかのように思えてしまう。

かく言うぼくも、この言葉の意味を深く考えることはなかったし、特に違和感もなく使っていた。でも、それではいけないことを教えてくれた人がいる。

脳性マヒ者の横田弘さん（一九三三〜二〇一三年）だ。

（中略）

福祉業界では「施設から地域へ」というスローガンが叫ばれて久しい。障害者が生きる場所は、以前は郊外の大規模施設や実家（親元）が多かったけど、最近ではグループホームや訪問介護などを利用しての地域移行が進んでいる。

「障害者も『地域』で暮らす」という考え方をさかのぼってみても、実は（注）「青い芝の会」にたどりつく。彼らは実家や施設を飛び出して、周囲の反対や世間の②い目にめげず、自力で介助ボランティアを集めては、街中のアパートで暮らしはじめたのだ。

横田弘さんも、実家を出て結婚し、子どもを育てながら、地元の横浜で生活していた。そんな横田さんは、ご自身の対談集の中で次のように記している。

我が家と隣近所、今の福祉用語で言えば「地域」（わたし、この言葉キライなんです。③空々しくて）の人たちとの付き合い、母親が職人のおカミさんで世話好きでしたから人の出入りもけっこう多かったことは確かです。

『否定されるいのちからの問い——脳性マヒ者として生きて』現代書館、二〇〇四年

この文章を読んで、ぼくは生前の横田さんに「『地域』って言葉、そんなにダメですか？」と聞いてみたことがある。そこで返っ

てきたのが次の一言だった。

④ 「地域」じゃない。「隣近所」だ。

当時、「地域」という言葉を疑ったこともなかった。ぼくは、この言葉にガツンと頭を叩かれたたたような思いがした。

「青い芝の会」の運動家たちが街へと飛び出した七〇年代は、車椅子くるまいすを見かけること自体が珍しい時代だった。⑤、街中で暮らそうとする障害者への風当たりも、いまよりずっと強かった。

当時にくらべたら、障害者の地域生活は進んできたと思う。「障害者も地域で暮らす」というスローガンに対する反対意見も、(直接的には)あまり聞かない。

では、世の中全体が障害者の地域生活を自然に受け止めているかと言うと、残念ながらそうとは言えない。仮に「地域」という言葉を「隣近所」に置き換えてみてほしい。

⑥ 「『地域生活』には賛成だけど、でも、うちの『隣近所』はちよつと……」という反応は、やっぱり出てくると思う。

「地域」という言葉は、使い方次第では結構あやうい。⑦、「この施設は夏祭りとかクリスマスに地元住民と交流しているので、地域との共生に取り組んでいる」という言い方もできなくはない。でも、夏祭りとクリスマスにしか交流がなかったら、それは「住み分け」だ。

⑧、グループホームが街中になれば「地域生活」になるかといえば、そうとも限らない。入居者への管理が厳しくて自由に外出できなかつたり、福祉関係者以外の人と付き合う機会がなかつたりすれば、それはやっぱり「地域生活」じゃない。

横田さんたちは、半世紀近く前から「地域で生きさせろ」と訴えてきた。横田さんたちが言ったり書いたりしてきた「地域」は、はつきりと「隣近所」という意味だった。障害者も、あなたの「隣近所」に住みたいのだ。あなたの「隣近所」で、あなたが生活するみたいに暮らしたいのだと訴えてきた。

「隣近所」という言葉には、生々しい生活実感がある。「地域」には、その生々しさが無い。ほどよく生々しくないので行政文書でも使いやすいのだろう。でも、横田さんたちが求めてきたのは「書類に書きやすい地域」なんかじゃなかった。

横田さんの目には、この言葉のハードルがずいぶん下がってきているように見えたのかも知れない。でも、このハードルを下げてしまうと、「地域」という言葉が、「実際には住み分けているけど、あたかも」10「しているかのような印象を与えるマジックワード」になりかねない。

横田さんが言った「空々しい」というのは、そのあたりを見抜いた感覚だったんじゃないかと思う。横田さんは詩人でもあったから、言葉にはとても敏感<sup>びんかん</sup>だった。

自分の「隣近所」を守ろうとする時、人は驚くほど保守的になったり、攻撃的<sup>こうげきてき</sup>になったりする。障害者運動の歴史を調べていると、そう感じることが多い。障害者が街中で暮らすこと。地元为学校（普通校）へ通うこと。それに反対してきた人の多くは、どこにもいる普通の人たちだった。

11人を遠ざけるのは「悪意」ばかりじゃない。「何かあったら大変です」「困るのはあなたじゃないですか」といった「善意」が人を遠ざけることもある。横田さんたちは、そうした「善意の顔をした差別」を鋭く告発してきた。

こんなことを書いているぼくにも、こうした保守性や攻撃性は、きつとある。子育てをしていると、「隣近所」で起こる変化<sup>かへん</sup>に過敏<sup>かびん</sup>になっている自分がある。この過敏さは、どこかで誰かを傷つけていないだろうか？

ぼくは、自分の息子に「いろんな事情を持った人たち」と共に生きてほしいと思っている。12、ぼくの息子も「いろんな事情を持ったひとり」だからだ。息子が排除<sup>はいじょ</sup>されないために、息子には排除してほしくない。

とはいっても、もし仮に、まったく異なる生活習慣や価値観を持った人から、突然「あなたの隣近所に住みたい」と言われたら、ぼくは、たぶん「ピクツ」とすると思う。

この「ピクツ」という感覚は何だろうか？

「ピクッ」としてしまおう自分って何だろう？

自分を「ピクッ」とさせるものは何だろう？

それが何かは、自分自身で考えなければならぬ。

横田弘さんには「自分で自分を見つめること」の大切さを教えてもらった。乗り越えるべき壁を見誤らないためには、「冷徹に自分を見つめること（自己凝視）」が必要なのだ。

共生社会への壁って、どこか遠くにあるわけじゃない。それこそ、ぼくたちの「13」にあるのだと思う。

（荒井裕樹『まとまらない言葉を生きる』（柏書房）より）

（注）「青い芝の会」——一九五七年に設立された「日本脳性マヒ者協会青い芝の会 神奈川連合会」のこと。横田弘さんが所属していた障害者運動団体のことである。

問1 ——線部①「意味の輪郭がぼやけてきた」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「地域」という言葉の意味が、固定されてきているということ。

イ 「地域」という言葉の意味が、狭められてきているということ。

ウ 「地域」という言葉の意味が、あいまいになっているということ。

エ 「地域」という言葉の意味が、認識されなくなっているということ。

問2

② にあてはまる、色を表す漢字一字を答えなさい。

問3 — 線部③「空々しくて」とありますが、本文中での「空々しい」の意味を説明したものととして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア わざとらしい      イ 冗談めかしい      ウ 晴れやかである      エ とぼけている

問4 — 線部④「『地域』じゃない。『隣近所』だ」とありますが、本文中での「地域」と「隣近所」との言葉の違いはどのようなことから生じますか。四十字以内で説明しなさい。

問5 ⑤・⑦・⑧・⑫に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

- ア 例えば      イ なぜなら      ウ もちろん      エ あるいは

問6 — 線部⑥「『地域生活』には賛成だけど、でも、うちの「隣近所」はちょっと……」という反応は、やっぱり出てくると思う」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。その理由を説明した次の文の□に入る言葉を、本文中から二十字で抜き出して答えなさい。

人々は、□が突然自分の生活圏内けんないに入ってくると、その変化に過敏けんないになることがあるから。

問7 — 線部⑨「半世紀近く前から『地域で生きさせろ』と訴えてきた」とありますが、横田さんたちの訴えとしてあてはまらないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 制限されることなくいろいろな人と交流をしたい。

イ 差別されることなく好きな場所に住みたい。

ウ 障害のない人と同じ暮らしをしたい。

エ 障害者専用の学校や施設を増やしてほしい。

問8 — ⑩にあてはまる言葉を、本文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問9 — 線部⑪「人を遠ざけるのは『悪意』ばかりじゃない」とありますが、この一文を通して筆者が伝えたいことはどういうことですか。四十字以内で説明しなさい。

問10 — ⑬にあてはまる言葉を、本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。



二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

秋のおわりが近づいてきたある日、ハリネズミは窓辺まどべにすわり、外を見ていた。

ハリネズミはひとりぼっちだった。訪ねてくるものはだれもないし、偶然だれかが通りかかり、(ああ、ここにハリネズミが住んでるんだったつけ)と思ってドアをたたいても、ハリネズミは寝ているか、あまりにも長いためらってからドアを開けるものだから、そのだれかは通りすぎてしまっているのだった。

ハリネズミは鼻を窓に押し当てて、目をぎゅっとつぶって、自分の知っているどうぶつたちのことを考えた。みんなしよっちゅう、たがいの家を訪ねあっていた。①だれの誕生日でもなく、祝うことがなにもなくても。ぼくがみんなを招待したとしたら……と考えてみた。

いままでだれも招待したことがないのだ。

ハリネズミは目を開けて、後頭部のハリのあいだを掻かき、しばらく考えてから手紙を書きはじめた。

親愛なるどうぶつたちへ

ぼくの家にあそびに来るよう、

キミたちみんなを招待します。

ハリネズミはペンを噛かみ、また後頭部を掻かき、そのあとに書き足した。

②でも、だれも来なくてもだいじょうぶです。

ハリネズミは眉まゆをしかめた。

この手紙を読んだら、ほんとうはだれにも来てほしくないんじゃないか、とみんな思うのではないだろうか？ あるいは、ハリネズミの気が変わるまえに急いで行かなくちゃ、あいつはすぐ気が変わるんだから、と思うかもしれない。

どうしよう、とハリネズミは考えた。

手紙を戸棚とだなの引き出しにしまうと、首をふつて思った。送るのはやめておこう……いまはまだ。

いまはまだ。ハリネズミはまた窓辺にすわってそのふたつの言葉について考えた。〈いまは〉と〈まだ〉。

ふたつの言葉が頭のなかで踊おどっているように感じられた。〈いまは〉はときどき不安げにまわりを見まわしていた。〈まだ〉は規則正しいステップを踏んでまわっていた。

③

だがそこで突然、ドアが開き、べつのだれかが入ってきた。〈当分〉だ、とハリネズミは思った。〈当分〉の背中であらわしているコートに見覚えがあった。

〈当分〉が〈いまは〉と〈まだ〉のほうに歩み寄り、あいだに割り込んでいっしょに踊りはじめた。

ハリネズミはためいきをついた。突然、ほかのなにかも入ってきたような気がしたのだ。なにか目に見えないもの。なにか、存在すると同時に存在しないものが。

〈ありえない〉だ、とハリネズミは思った。〈ありえない〉は目に見えないはずだ。

しばらくすると〈当分〉が出ていき、〈ずっと〉が入ってきた。分厚ぶんあつい、綿入りわたいりの冬のコートを着て、帽子ぼうしをかぶった〈ずっと〉も、〈いまは〉と〈まだ〉のあいだに割りこんできた。

ハリネズミは心臓しんぞうが高鳴るのを感じた。まるで言葉たちがハリネズミの考えを突き破り、踊りながらこちらに迫せまってくるようだった。自分になにかを求め、自分となにかをしようとしているようだったが、それがなんなのかはわからなかった。

「はいまは」〈「まだ」〉「ずっと」はともにテーブルの上に飛びのってダンスをつづけた。しだいに速く、しだいに荒々しく。ハリネズミは見えていられなくなってきた。頭のなかで目を閉じてから実際に目を開けようと思った瞬間、④が突然、姿を消した。

「はいまは」〈「まだ」〉はテーブルを下りて、どうしていいかわからず床にとどまっていた。おたがいをみる目は（どうする？ まだ踊る？）と言っているようだった。「はいまは」は眉を上げて踊りたい意思を示したが、「まだ」は首を横に振った。

騒がしい音が聞こえ、ふたたびドアが開いて「一度」〈「も」〉が入ってきた。陽気に跳とびはね、きゃっきゃつと声を上げていた。どちらもヘンな赤い羽根を頭につけていた。

「一度」〈「も」〉が「はいまは」〈「まだ」〉をつかまえると、その瞬間、ドンチャン騒ぎはやみ、みんなはずかしく踊りはじめた。ハリネズミの部屋は暗くなっていた。

「はいまはまだ一度も」、とハリネズミは思った。

踊っている言葉たちが突然、輝かしく見えた。そのまま踊りつづけて、とハリネズミは思った。ずっと踊りつづけているといい。言葉たちのうしろは果てしなく真まつ暗闇くらやみなのだから。

これじゃあ、まるでゲームだ——ハリネズミはそう思い、目を開けた。ゲームはおしまい。訪問はゲームではないのだ。ベッドに横になると、戸棚の引き出しにしまった手紙のことを考えた。

もしかしたらみんな、来られないと書いてよこすかもしれない。きつとそれぞれ理由があるだろう。

何十通もの手紙が、ドアの下からなかに吹き寄せてくるようすが早くも目に浮かんだ。ハリネズミは一通ずつ拾いあげて読んだ。

「もしぼくが行くとしたら、三段のハチミツケーキを出してほしい。砂糖さとうがまぶしてあって生クリームふが噴ふんきだす噴水ふんすいつきで、その上にはフォンダンが空みたいにかぶさっているケーキ。でもぼくは行かないと思う」

「キミのところに行つたばかりだが、ドアを開けてくれなかったね。窓からキミがさつとベッドの下に隠れるのが見えたよ」

「呼んでくれてありがとう！ キミの家にあそびにいけるなんて！ なんて楽しいんだ！ 手紙を読んだとき、ジャンプして喜びま

した！ ハリネズミの招待……でもぼくは行きません」

「たぶん行かないと思います。まだ理由はわからないけれど」

「頭のなかでうかがいます」

「行かないけど、元気でね」

ハリネズミはためいきをついた。もちろんだれも来ないのだ。

手紙をベッドの横の床に置くと、仰向けに寝た。ホッとしたような、悲しいような気持ちだった。⑤ 孤独は、ハリのようにはぼくの

一部なのだと思つた。ハリのかわりに翼をもっていたら、ぼくはこれほど孤独ではないだろう。どこにでも飛んでいけたら、なにかを強く望む必要もないだろう。

寝ようとしたがうまくいかなかった。もしかしたら、みんな来るかもしれない——そんな気もしていた。

ハリネズミは身震いし、起き上がつて紅茶を淹れた。⑥ 自分自身のために、二つのカップに。

紅茶を飲み終わると引き出しから手紙を出して読み返してみた。

もしかしたら明日、みんなが訪ねてくるかもしれない。みんないつせいに。明日の朝早く。

ハリネズミは寒気がして、手紙を置いた。どうぶつたちがこちらに向かつてくるのが聞こえるようだった。森が興奮で震えていた。

みんなが玄関の前で押しあいへしあいしてさげんでいた。「ハリネズミ！ 来たよ！ お客さんだよ！ 招待してくれてありがとうと

う！ みんな来てよ！ だれも欠けてないよ！」

みんなが強引にドアを押しあけて入ってきた。ほとんどのどうぶつは歩くか飛ぶか這うかしていたが、カワカマスとコイ、そしてしばらくして入ってきたクジラとサメはこの機会に連れてきた高潮に乗り、泳いでいた。

「なんて楽しいんだ、ハリネズミ！」みんながさげんでいた。「紅茶もある？ ケーキは？」

紅茶を淹れるには客の数が多すぎた。ケーキのほうはかなり日のたった小さなものが一つあるだけだった。ハリネズミは⑦

をすくめて困ったようすをしていた。

「だいじょうぶだよ」とみんなが口々に言った。「ぼくたち、踊るから」⑧を組んで歌いはじめた。「ぼくたちはお客さん、ハリネズミのお客さん。みんなそろって、紅茶はいらない」そうしてテーブルのまわりを踊るのだった。

「でもキミたち、ぼくのことを怖くないの？」⑨ハリネズミはそうたずねると、ハリをなるべくまっすぐに逆立てた。「怖くないよ」みんながさげんだ。「うれしすぎて怖がつてなんかいられないんだ」

すぐにどうぶつたちは踊りながら床を突きぬけて下に落ちた。その穴からモグラとミミズが這い出してきて、自分たちもあそびに来たんだとさげんだ。泥どろのケーキを手みやげにもってきていた。何年も腐くさらないが、すぐに食べてもかまわないとのことだった。

「だれがこんなことを予想しただろう？」という声が上がった。

ぼくじゃない、とハリネズミは思った。そつと外に出ると家の裏手にある灌木かんぼくの茂みにもぐりこんだ。

しばらくするとどうぶつたちは踊るのをやめた。ハリネズミがいけないことに気づいたのだ。

「ハリネズミー！　ハリネズミー！」みんながさげんでいた。

その声は森のはるかむこうにまで届いたので、ほかのどうぶつに後れをとらないよう、ラクダとシロアリまで砂漠から駆けつけた。だがハリネズミは、いつそう深く茂みしげに姿を隠してしまった……。

⑩頭を振って〈キミたちみんなを〉を〈キミたちのなかのだれかひとり〉に変え、〈だれか〉の前に〈せいぜい〉もつけたして、手紙を読み返した。

(トーン・テレヘン 著　長山さききながやま 訳 『ハリネズミの願い』〔新潮社〕より)

問1 — 線部①「だれの誕生日でもなく、祝うことがなにもなくても」とありますが、ここにはハリネズミのどのような気持ちが

表れていますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 誕生日やお祝い事でもないのに家を訪れることをわずらわしく思う気持ち。
- イ 何も用事がなくてもたがいの家を訪ねあうことをうらやましく思う気持ち。
- ウ だれかの誕生日をお祝いしにしょっちゅう訪問し合うのを面倒がる気持ち。
- エ 何か特別な日でもない時にたがいの家を行き来することをためらう気持ち。

問2 — 線部②「でも、だれも来なくてもだいじょうぶです」とありますが、手紙の最後にそのように付け足したのは、ハリネズ

ミにどのような気持ちがあったからだと考えられますか。このときのハリネズミの気持ちを、手紙の前半部分の内容も踏まえ、  
四十字以内で説明しなさい。

問3 ③ には、次のア～エの四つの文が入ります。正しい順序で並べ替え、記号で答えなさい。

- ア そのほうが言葉たちの姿がよく見えると思ったのだ。
- イ ハリネズミは目を閉じた。
- ウ まるでおたがいのことにしか関心がないように見えた。
- エ 〈まだ〉が〈いまは〉を抱き、〈いまは〉がしなだれかかっていた。

問4 ④ に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 当分
- イ まだ
- ウ ずっと
- エ いまは

問5 — 線部⑤「孤独」とありますが、これとほぼ同じ意味を表す言葉を、——線部②より前の本文から六字で抜き出して答えなさい。

問6 — 線部⑥「自分自身のために、二つのカップに」とありますが、ここにはハリネズミのどのような気持ちが表れていると考えられますか。このときのハリネズミの気持ちを、四十字以内で説明しなさい。

問7 

⑦	・	⑧
---	---	---

には共通して、身体の一部を表す漢字が入りますが、その漢字を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 脚あし      イ 肩かた      ウ 眉まゆ      エ 腕うで

問8 — 線部⑨「でもキミたち、ぼくのが怖くないの?」とありますが、ハリネズミはなぜそのように尋ねたと考えられますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ハリネズミは、全身にハリを持っているから。  
イ ハリネズミは、ハリで身を守ろうとするから。  
ウ ハリネズミは、以前ハリで攻撃を加えたから。  
エ ハリネズミは、ハリをかくし持っているから。

問9

——線部⑩「頭を振って〈キミたちみんなを〉を〈キミたちのなかのだれかひとり〉に変え、〈だれか〉の前に〈せいぜい〉もつけたして、手紙を読み返した」とありますが、ハリネズミはなぜそのように手紙に言葉を付け足したのだと考えられますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 前の手紙の文面のままだと、ラクダやシロアリまで砂漠から駆けつけてしまうと思ったから。
- イ 前の手紙の文面のままだと、どうぶつたちが踊ったり叫んだりし続けてしまう気がしたから。
- ウ 前の手紙の文面のままだと、どうぶつたちがいつせいにあそびに来てしまいそうだったから。
- エ 前の手紙の文面のままだと、どうぶつたちはみんな来てしまい特別感が出せないと思うから。

問10

ハリネズミの人物像や性格を表した言葉として最も適切なものを、次のア～エの中からあてはまるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 積極的
- イ 社交的
- ウ 傲慢ごうまん
- エ 臆病おくびょう



三

次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に直しなさい。

- ① コクモツの価格が上昇する。
- ② 自動販売機でコゼニを使う機会が減った。
- ③ コンサートがエンキされた。
- ④ 各党の経済セイサクが注目される。
- ⑤ ナンミン支援の輪が広がる。

問2

次の会話を読み、①⑤に入る、からだの一部をあらわす漢字一字をそれぞれ答えなさい。なお、同じ記号には同じ漢字が入ります。

Aさん

「昔、高尾山たかおさんの先にある陣馬山じんばさんまで①を伸ばしたことがあるよ。祖父が登山に②がなくて、一緒に連れて行ってくれたんだ」

Bさん

「山登りはいいと、みんな③をそろえて言うね。私も、遠足では高尾山に登ったことがあるよ。④をすますと、鳥の鳴く声が美しかったことを覚えているよ。陣馬山まで行くと、本格的な登山になるね」

Aさん

「祖父が、②⑤の先だと言っていたから、すっかり③に乗せられてしまったよ。実際はそんなことはなくて、大変だったよ。①が棒のようになった」

Bさん

「頂上に着いたときには⑤が高かった？」

Aさん

「もちろん。家に帰ってから自慢じまんしすぎて、家族から④にたこができると言われてしまったよ」

以下余白



